

ライプチヒに残る和紙と

ゴシック祭り



さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター)
イラストレーター

今年の春、ウィーン滞在中にライプチヒのドイツ文書博物館に所蔵されている和紙を取材にいった。その和紙は百年以上経た今、美しい輝きを保ち、日本の和紙のすばらしさを学芸員が説いていたと言う。

私の作品も特殊和紙に染め出したもので、二十年くらい経った作品を見ると、和紙と色がなじみ、鮮やかな美しい色に変化していた。新作には出せない色合いである。この作品も百年後もきっと鮮やかな色を保っているに違いない。

作品を作り始めた頃は他にない和紙独特の魅力を感じていたが、年月を経ても、鮮やかな色合いが残る和紙のすばらしさを改めて知った。

博物館は開館していたが土日月と担当官がお休みで、見ることが出来なかった。再び行くことにした。

当地では毎年恒例のゴシック祭典が開催中だった。街中を染める黒装束、ゴシックファッションに身を包んだ愛好家が参加。世界から約二万人の人々が集い、街中で百五十ものバンドライブも行われ、暑い日だった。

銀座のすずめ



永岡 慶之助
(作家)

よく知られる「知床旅情」を唄い、独特の節回しと歌声で定評がある、森繁久弥が唄った歌の一つに、「銀座のすずめ」というのがある。歌というよりも、森繁節が際立った、心うつメロデーと歌詞の、モノローグ風のシャソンである。

他の街では暮らせなくなった男「俺」が、銀座の街を飛び回っている「すずめ」に準えて、我身の心境を語ったもので、彼は、「死んだら何も残らない、でもそれでいいのさ」と達観して、今日も銀座の街へ飛び出して行くのだ。森繁の声と良くマッチしており、私は、日本のシャソソンの傑作だと、密かに思っている。

かくいう私も若い頃、小すずめほど

になりかけた時期があった。勤め先の出版社が、銀座にあったからで、十年ほど、この街に世話になった。しかし、私が目撃した銀座は、とても「俺ら」が、魅了されるほどの、銀座ではなかった。

その頃の銀座の大通りは、天幕囲いや、むき出しの露店が、通路狭しとばかりに軒を並べ、フライパンや鍋、あるいは白いズックぐつ、あるいは古着など、ありとあらゆる日用雑貨を売っており、道行く人の目の表情も険しかった。

だいたい、食券などというチケットを持たなければ、一杯の粥にもありつけず、飛んでいるすずめですら、うかうかしていると、焼き鳥にされかねな

い、という凄まじいご時世だったのだ。それでもやがて、「月ヶ瀬」で、あんみつを出すようになったそうだ！という噂がたったと思うと、今度は、「コロンバン」で、朝からコーヒーが飲めるそうだし！という情報もたらされた。

半徹夜をした、ある朝、私と同僚は、コロンバンへ出かけてみた。三越も、松坂屋も、まだシャッターが降りたままの時刻であった。

爽やかな初夏の朝で、店の階段を上ると、もうコーヒーの香りが漂ってきた。さすがにまだ客は少く、中央のテーブル席に、たった今、取材先から戻ったばかり、と思ほしき、足もとに大きな鞆を置いたカメラマン風の男が、コーヒー茶わんを前にして、心地よさそうに電気カミソリで髯をあたっていた。私が、電気シェーバーなるものを始めて見た時のことだった。この男は、電気シェーバーが、ご自慢だったのかもしれない。

実際の席には、もう一人、銀髪の老

婦人が、口もとに茶わんを優雅に運びながら、窓の外を眺めていた。彼女は、おそらく地元の人で、散歩の途中に、ちよつと立ち寄った、という風情であつた。

この頃であつたらうか、高名な海軍大将の子息が、サンドイッチマンになつたといふので、新聞紙上を随分と賑わしたことがあつた。私も、四丁目の街角で見かけたが、プラカードを持って、顔を背けることなく、堂堂と歩く広告塔の役目を果たしていた。

この頃を境として、銀座の街にバレーや、キャバレーが現われ、急速に街の姿を変えていった。

それでも勤め先のあつた銀座西二丁目界限には、なお下町風な穏やかさがあつた。社の前には、江戸以来の歴史を持つ乾物屋があるかとおもうと、焼けビルや広場があり、野球好きな連中は、昼休みにキャッチボールを楽しんだ。そして社の並びには、この界限の大地主だという薬局があり、路地の奥には、豆腐屋などがあつた。

ある日、私が乾物屋のおやじさんと立ち話をしていると、おやじさんが不意に、

「おやー珍しい、定齋屋だ！」

私は、「えっ！」と思つた。確か『定齋屋』とは、江戸時代の流しの薬屋のほずである。見れば、濃紺の腹掛け、細めのパッチ、地下たびを穿いた、いなせな壮年の人物が、肩の前後に、小引き出しがたくさん付いた小箆筒を、天秤棒でかつぎ、足運びよく、リズミカルに歩いていくのだが、引き出しの丸環把手が、その度に「カタカタ、カタ、く、く」と鳴って、まるでそこだけ江戸の街に、タイムスリップしたかのような光景であつた。ただ、今もって不思議でならないのは、彼がひと声もなく通り過ぎていったことだ。戦後とはいえ、昭和三十年代にもなつて、彼が趣味や道楽でやっているとは思えなかつた。

いつしか屋台の群れや、焼けビルは姿を消し、銀座は、都会美を備えた街へと、変貌していった。その頃、私も

銀座を離れ、自立の道を探していた。

そして、明治初期を題材とした『銀座煉瓦街始末』なる短編小説を、同人誌に発表したところ、どういふ経緯をへて読まれたかは知らないが、タウン誌『銀座百店』の編集部から、カステラが送られてきたという。同人誌の代表者I君が、電話のむこうで、

「君の名前が書かれていたが、暑いさなかだし、転送するのも面倒だし、食べてしまつたよ。」

「ああ、それでよかつたよ」と私。

そんな会話が、あつたことを記憶している。かつて世話になつた銀座への、心ばかりの返礼になつたかという思いになつた。

そして今、ふと思うのは、森繁節の「銀座のすずめ」は、どの段階の銀座に魅せられたのだろうか。自称「小すずめ」などの私は、今なお、銀座八丁のどこかの裏通りを、あのいなせな定齋屋が、黙々と通り過ぎた、牧歌的ともいえる銀座を、心強く思い、懐かしむのである。

妙みょう



山本千明

(ECC英会話講師)

「うわあー！」と自然に声が出た。
小さなガラスの小窓の中には変幻自在に色も形も光さえも変える摩訶不思議な世界が存在している。

手の中に包み込める程の、物理的には小さな筒。なのに覗き込むと、まるで宇宙創造のような壮大にして美しい、色と光線の協奏曲が繰り広げられていく。

その筒の名は「万華鏡」。辞書(角川国語辞典)を引くと「まるいつつの中に三角に組み合わせた長方形のガラ

ス板と色ガラス片などを入れてのぞくおもちゃ。回すと、中にいろいろの美しい模様ができる。にしきめがね」とある。小学生の時、学校で作った万華鏡は、確かにそんな感じのものだった。「ドライタイプ」と呼ばれるものらしい。回すとカラカラと乾いた音がして、昭和的、アナログ的な味わいがある。

もう一つ、「オイルワンド」というタイプのものが、その時私に手にしたもので、思わず何度もため息が漏れ

た。外見的には「まるいつつ」ではなく、丁寧にハンダづけされた三角形のステンドグラスだった。さらに、その先には、オイルの中、色とりどりのガラスの入ったビーカー状の筒が取り付けられている。その部分を動かすことによつて、ゆるりと流れ落ちるガラスが、正に「万華」の模様を作り出していく。これは「のぞくおもちゃ」の領域をはるかに越えた「芸術」。明らかにアートそのものだった。

この繊細で神秘的な作品を生み出している「アーティスト」が、香川在住の「プチベツシユ」さん。彼女と初めて出会った時、最初の印象は「何と可愛らしい人」だった。ふわりとしたスカート、白ゆりのような清楚さを身にまとい、くるりとした目が愛らしい。うら若き女性作家さんだ。

プチベツシユさんとの出会いは、いくつもの偶然の結果だった。

ある日、たまたま一緒にいた友人と、ふと思ひ立って、初めて行ったお洒落なカフェに、思いがけず、友人

の知り合いの紳士がお茶を飲んでいて、彼女が話かけたことで私も話の輪に加わることとなり―その方が「知り合いに万華鏡作家が居てね」と発したひとりに「万華鏡!?お会いしてみたいです!」と私が首を突っ込んだのが始まりだったのだ。そして願った通りに出会えた作家さんと彼女の作品達に、私はすっかり魅了されてしまった。ただ見るだけでもいやされるが、その作品が出来上がるまでの話を聞くと、さらに深みを感じられる。イギリスの大学でグラフィックデザインを学んだ後に「なんとなく」フランスへ。油絵でグループ展をする等の活動をしているうちに「なんか楽しくなって」二年ほど滞在。やがて香川に帰ってきたが、さらに東京銀座で水彩画のグループ展。そして二〇一二年、友人の知り合い宅でステンドグラスに出会う。紙と筆だけでは表現できない、光+色のコラボレーション。自然光や室内照明など、場所によって表情が変わると言うアートに興味を持つことになる。教室

に通ってその技術を学び始めたが、ステンドグラス作品は人に差し上げるものとしては大きすぎるかも…と思っていたところ、「たまたま」同じ教室の中にステンドグラスで万華鏡をつくる人が居た。覗いた瞬間、「おお!」と思つたとか。直様、本を片手に見よう見まねで自主制作。その記念すべき第一号を、家族でカフェをしている友人のお母さんにみせると「感動してめちゃくちゃ誉めてくれた」らしい。そこで俄然ヤル気が出てきた彼女は様々な色や形の万華鏡を作り始めた。綿菓子のようにふわつとして穏やかな雰囲気を持つ彼女だが、制作過程を聞くと、その細やかさと集中力に驚かされる。作業中、小さなホコリが一つ入っただけで、内側の鏡に写って大量のホコリに見えてしまう。さらに中につける鏡は、「超デリケートなガラス」で、ティッシュで拭いても傷だらけになるらしい。全神経を集中させて職人技を発揮することで、美しい模様を写し出す万華鏡が完成するのだ。鏡の微

妙な角度の差で立体的に見えたりグラデーションができたり―と、「実験」の楽しさもあるという。

二〇一三年、秋。初めての作品を褒めてくれたママさんのカフェ、「ネネリッキ」で個展が開かれた。次々と訪れる人たちが万華鏡を覗いた時に見せる驚きの表情や優しい笑顔。それが一番嬉しかったと幸せそうに微笑んだ。

そして同年、彼女は日本万華鏡大会に出品。見事ソニー賞に選ばれた。その作品は東京展（科学技術館）―京都―大阪―北海道、と各地の展示会場でお披露目されている。

偶然の重なるの延長上で彼女は万華鏡に出会った。こうして彼女のことを書かせてもらっている私も、あの日の偶然がなければ、彼女の作品を見る機会も逃していただろうと思う。

一つの万華鏡の中で全く同じ模様ができるのは―四六〇〇億年に一度。偶然が織り成す「妙」の中に人は心を動かされるのかもしれない。

たっぷりの時間が与えられ、 思うこと、気づくこと

宮本 富夫

(高松大学 名誉教授)



この四月から、晴耕雨読の生活となる。時間がゆつくりと進行する時空に身を置くことに。たっぷりの時間が与えられ、太陽の移動が教える自然の時刻をもとに活動する。曜日を意識する必要がないせいか、「日々休日なり」という感覚。ありがたいこと、この上なし。天気予報をもとにその日の作業メニューを考える。晴れると、庭に出るか、水田へでかけるか、畑へ出かけるか、それとも山へ出かけるか。

野外の作業にかかわっていると、時間の進行を早く感じる。不思議な気がする。デスクワーク等、室内で忙しく過ごした三十数年の日々からは想像することができなかつた毎日。おかげで、今まで見過ごしてきたことに気づくことが多く、新たな発見との出会いが実に楽しみ。せかされない状況が心に余裕をもたらせ、周囲の変化をごく自然に受けとめ、そのことがさまざまに気づきに繋がっているのかもしれない。五感を通して素直に周囲の変化を受け入れているような気がする。

先だつても、ドクダミの白い花が庭の暗闇に浮かび、夜目に何ともいえない、少し幻想的な雰囲気醸し出しているのに気づく。毎年のように、この頃ドクダミの花を見ていたはずなのに、あらためて気づく。ドクダミの白い花には、蛍光成分が含まれているのだろうか、闇に浮かぶように見える。なぜかは定かでないが、我が家の庭には、あちこちにドクダミが生育する。花のシーズンの中には、庭に独特な世界が出現する。何年か前に、我が家を訪ね来た友人が、「ドクダミがこんなに多く生育するなんていいところだね」と言っていたことを、思い出した。確かに、梅雨どきの夜の闇に浮かぶドクダミの白い花の光景はいい。雨上がりの後の光景は格別である。

本業の片手間に取り組んできた稲作にも、本格的に取り組むことができる状況となる。追われるように農作業に取り組んでいたことがうそのようで、工夫する時間がたっぷりと与えられる。稲の生育に優しく、必要なスト

レスを与えない、農薬の類をできるだけ使用しない方向で米作りをあれこれ模索する時間が取れそうである。これまでも、殺虫剤等の農薬を使わずにやってきた。こまめに水田周辺の草を刈り、畔の草をのばさない等、いくつか試行を積み重ねてきた。が、カメムシの被害には、年によって受ける程度の違いはあるものの、悩まされ続けている。カメムシの被害を受けると、稲は対抗措置として防御物質を米粒の中につくるのだろうか。米粒の中に黒い斑点を生ずる。斑点米である。斑点米は、一粒ずつ味わうと、特有の苦みを覚える。精米しても、黒い斑点は多少その色が薄くなる場合もあるが、痕跡が残る。ごはんの中に黒みをおびた斑点米が見つかったと、たぶん、食欲を下げる方向での効果をもたらすことだろう。ごはん全体の味として、苦みを覚えることは、まずない。が、見栄えがよいとはとてもいえない。「カメムシ対策には、推奨の農薬を用いた防除を」と、JAによる栽培しおりは教え

る。しかし、この種の農薬は昆虫の神経系のはたらきを阻害することが知られているネオニコチノイド系化学物質を含む場合があるので、使用する気には到底なれない。

カメムシ対策として、今年度から畔のまわりにハーブを植える試みを始める。ハーブにカメムシがよりつかないようなので、カメムシの避難場所となつている畔の草の植物構成を変え、カメムシがよりつきにくい畔環境にし、被害をゼロに近づけようという考えである。ハーブが増えるのに少し時間を要するので、結果の判定には、少し時間がかかるかもしれない。ハーブの根が張り巡らされた土壌にはモグラも少ないようなので、モグラ対策にもなるのではないかと期待している。この工夫が効果的なものとなるよう、期待しながら稲の生育を見守ることになりそうである。

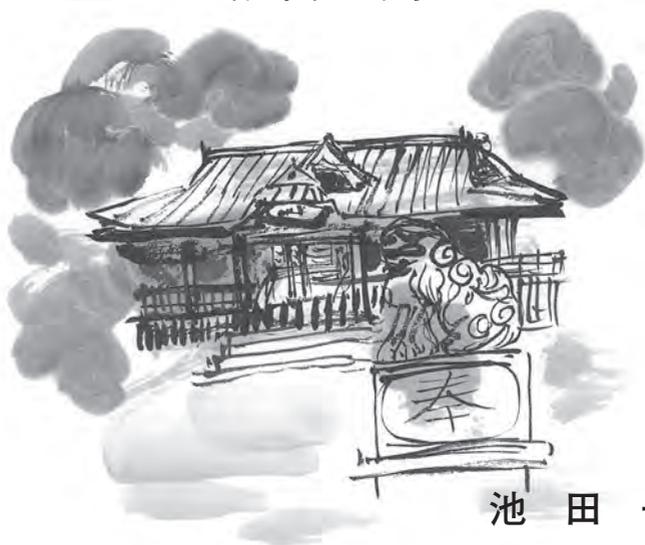
水田に水をひくまえの、土をならし平らにする作業に取り組んでいた際、目と鼻の先で木の幹を叩くような音が

していることに気づく。ひよつとしてキツツキの仲間かなと、それとなく目をやると、コゲラがあちこちと幹を移動しながら、特有のリズムで幹にくちばしをぶつけている様子が見える。その音が耳に心地よく響く。私の視線が注がれていることには気づいているのか、いないのか。そのリズムをまったく変わらない。飛び去る様子も見えない。見ると、つついている幹は、緑の葉をつけていないもの。ちゃんと、生きている幹とそうでないものを区別している。枯れはじめている幹に昆虫の幼虫などが見つかることを知っているからなのだろうか。つつかれた衝撃で幹の中の虫が何らかの動きをするのを敏感に察知するのだろうか。つついた時の音の反響として幹の中に虫の作った空洞があることを知るのだろうか。あれこれ思いをめぐらす。いずれにせよ、虫を見つけ、その日のえさとすることになるのだろうか。こんなことを想像しながら、生きるためとはいえ、そのすべを工夫してきたコゲラの智慧に

心が動く。しばらく幹のあちこちをつついた後、何事もなかったように飛び去った。私の存在にはまったく無頓着の様子で。「里近くに出現する野生の動物は、農作業にいそしむ人を、その環境に溶け込んでいるためか、自然の一部とみなす」ということを聞いたことがある。私も自然の一部とみなされたのだろうか。ほんまものの農業者に雰囲気だけでも近づいているのかも知れない。喜ぶべきことかな。



渋谷・金王八幡宮の男



池田 一 貴

渋谷金次郎は詐欺師である。

名刺を見ると、金次郎には「こんじろう」と目立つルビ（振り仮名）が振ってある。何種類もの名刺を持ち歩いているが、使途を間違えることはない。天性の詐欺師なのだろう。

「私はね、世が世ならば、渋谷のプリンスなのですよ」

これが渋谷金次郎の殺し文句だった。渋谷の金王八幡宮の名称の由来である渋谷金丸常光の末裔だというのである。

神社が金王丸（こんのうまる）にちなんで金王（こんのう）八幡宮と呼ばれていることは、地元の子なら知っている。渋谷金次郎がわざわざ「こんじろう」という読み方を強調しているのも、金王丸の子孫であることを示唆するためであろう。金王八幡宮ではかつて「当神社と渋谷金次郎なる人物とは一切関係がありません」と声明を出したことがあるが、それを憶えている人は今ではほとんどいない。

渋谷金次郎は「大学教授」だの「アーティスト」だの「歴史研究家」だの「投資コンサルタン」トだのという、おそらく十数種類の名刺を持っているが、なかには「〇〇会社代表戸締役」とい

う、ふざけた名刺もある。取締役ではなく「戸締役」である。「こんじろう」のルビに目をうばわれて「戸締役」に気が付かない人が多いという。

なかには「戸締役」に気が付いて、

「これは誤植では？」

と名刺から顔をあげて訊く人もいるが、

「あつはつは。洒落ですよ洒落。社長は会社の金庫を守る戸締りが一番重要な仕事ですから」と笑い飛ばす。まったく掴みどころのない男なのである。

ルポ・ライターの松崎誠一が渋谷金次郎にやつと会えたのは、渋谷の秋祭りの日だった。

松崎は最近、名刺の肩書をルポ・ライターからノンフィクション作家に変えた。やっていることは同じで、取材執筆した記事を雑誌に発表することのだが、ルポ・ライターという肩書は最近流行らないからだ。それに、取材でルポ・ライターというと軽く扱われ、ノンフィクション作家というと大切にされるといふ待遇の違いも経験した。世間の人々は肩書ひとつで態度を変える。つまり肩書に騙されやすいわけである。

松崎が渋谷金次郎の名前を聞いたのは、ある詐欺事件の取材中に知り合った刑事からだった。

「この事件とは関係ないと思うが、手口が渋谷

金次郎に似ている」

その言葉が妙に耳にこびりついていたので。

刑事に何度も酒を飲ませ、必死に頼み込んで、渋谷金次郎の写真を入手した。刑事は、「金次郎は渋谷の秋祭り、すなわち金王八幡宮の例大祭には必ず顔をみせる」と教えてくれた。

九月十四日と十五日が秋祭りで、この両日を見逃すと渋谷金次郎には会えないだろう。そう思うと体が二つも三つも欲しかった。

祭りでは、円山町会とか柳通り商励会とかの提灯をつけた各町の神輿が次々と繰り出し、渋谷駅前からセンター街などの雑踏を威勢よくねり歩く。その範囲は広い。渋谷駅周辺だけでなく、青山周辺も別の町会からいくつもの神輿が出る。全部に付き添うことは不可能である。金次郎がどこで祭りを見物するか予想もつかない。

そこで結局、金王八幡宮で待つことにした。金次郎も両日のうち一度は神社に参拝するだろう、と思ったからである。というより、それに賭けるしか方法がなかった。

賭けは当たった。十五日の昼過ぎに、混雑する金王八幡宮の境内に、渋谷金次郎が姿をあらわしたのだ。参拝する姿は、写真よりすこし老けているが、間違いない。

どう声をかけようか迷った。「渋谷金次郎さんですわね」では刑事みたいで警戒されるだろう。かといって「私はノンフィクション作家の松崎誠」と申しますが」でも、やはり警戒されそうだ。

迷った末に声をかけようとしたら、金次郎の連れがあらわれた。若い女性である。またしても困った。しかし、このチャンス逃したら来年末まで待たなければならぬ。尾行するという手もあるが、成功するとは限らないし、相手はプロの詐欺師だ。勘づかれる公算が大きい。

ええい、ままよ、と金次郎の前に立つた。

「渋谷さん、お久しぶりですね。いや、お元気そうで何よりです。よろしかったら、お茶でも飲みませんか」

切羽詰まると、思わぬ言葉が出てくるものである。この挨拶が、この場面では最も自然だった。

金次郎は一瞬眉根を寄せたが、すぐに笑顔になり、こう答えた。

「はて、どなたでしたか。年をとると忘れっぽくなっていきません。よければ、お名刺を頂戴できますか」

松崎は名刺を出した。私ながら金次郎の表情を必死で読んだ。しかし、金次郎は顔色一つ変えない。

「ふーむ。お名刺を拝見しても、まだ思い出せませんなあ。いつごろお会いしましたか」

「あれは五年以上も前だったような……あの、私もお名刺を頂戴できますか」

「いや、あいにく今日は持っておりませんし、お茶を飲む時間ありません」

「では、明日か明後日にでも、お電話をいただけますか。あの『渋谷のプリンス』というお言葉が忘れられません。実は私も今、渋谷区の歴史を調べているところですし、こんなところで渋谷のご研究をなさっている渋谷さんにお会いできるとは、八幡さまのお導きかと驚いています。ぜひご連絡ください」

これも思いつきでとっさに出た言葉だったが、われながら上手な口実だと松崎は思った。

渋谷金次郎は返事をせず、軽く一礼して去った。

二

松崎誠一は祈るような思いで電話を待った。そして三日後に、やっと電話がかかってきた。かき口説いたあげく、一週間後に渋谷のレストランで会う約束を取り付けることができた。

会う前に渋谷区の歴史や、とくに金玉八幡宮の歴史などを下調べしておいた。それが会う口実な

のだから、無知を晒すわけにはいかない。

当日、松崎の第一声はお詫びの言葉だった。

「以前お会いしたというのは嘘でした。申し訳ありません。でも、渋谷区の歴史を調べているというのは本当です。ぜひ渋谷さんのお話が聞きたかったんです」

この謝罪はひとつの賭けだった。金次郎は怒って席を立つかもしれない。あるいは松崎の正直さに免じて嘘を許してくれるかもしれない。松崎は後者に賭けた。

金次郎は初めて、しかめっ面を見せた。しかし席を蹴って立つことはなかった。

「神社で、どうして私だと判ったのですか。会ったこともないのに」

「他の事件の取材で知り合った刑事が、渋谷区の歴史のことなら、この人が詳しいよ、と写真を貸してくれたんです」

「なるほど。その刑事は私のことを、まさか歴史研究家などとは言わなかったでしょう」

「はい。詐欺師だと」

「ははは……」

金次郎は初めて声を出して笑った。その人なつこい笑顔を見せると、とても詐欺師とは思えない。この顔に人は騙されるのだろうかと思った。

「正直なお人だ。で、詐欺師から歴史の何を訊きたいのですかな」

「失礼な言い草だとは承知していますが、詐欺師の話の九十九パーセントは事実であり、パーセントで人を騙す、と聞いたことがあります。であれば、歴史の事実も相当に深く研究しておられるに違いないと思いました。とくに金王八幡宮に關しては」

「なるほど。お察しのとおり、金王八幡宮については他人様より多少は詳しいと自負しております。まあ、学問的にはいざ知らず」

「それでいいんです。ほくも学問のために調べているわけじゃありませんから。あくまでも東京の秋祭りというテーマの一環ですが、金王八幡宮の歴史には納得できない部分があります」

「ほほう、どの部分ですか」

松崎は、自分が予定したペースで話が進んでいることに安堵した。最初の二、三回は信頼関係を築くために歴史の話をし、機会を見て詐欺の話に移るつもりである。そのためにも歴史の話で下手に底意を悟られてはいけない。

三

松崎誠一はノートを見、金王八幡宮の創建の経

緯や歴史をおさらいしながら、疑問点を挙げていった。(以下、少々堅苦しい歴史記述が続きますが、お許しあれ)。

神社によれば、創建(御祭神の鎮座)は、平安後期の寛治六年(一〇九二)とされている。今から九百二十一年前だ。これに異論はない。

御祭神は応神天皇。これにも異論はない(八幡神社の御祭神は一般に応神天皇であり、それに母君の神功皇后を併せ祀ることもある)。

川崎基家は嫡子の重家とともに後三年の役(一〇八三〜一〇八七年)に参戦し、源義家の下で大功を立てた。基家が武蔵谷盛庄七郷(渋谷、赤坂、麻布など)を与えられたのもその恩賞である。

① 一〇九二年に八幡神をこの地に勧請したのは八幡太郎源義家だという。ところが別の資料では、その部下である川崎基家が創建したともいわれている。どちらが本当か?

② 嫡子重家の代に、堀河天皇から渋谷の姓を賜り、渋谷重家となった。さらに当八幡宮を中心に館を構え居城とした。渋谷城である。一説によれば、これが渋谷の地名発祥の由来ともされる。では、賜姓が先か、地名が先か?

渋谷重家は子宝に恵まれなかった。そこで夫婦で八幡宮に祈願を重ねた。するとある夜、金剛夜叉明王が妻の胎内に宿るといふ霊夢をみて、待望の男子を授かった。夫婦は喜び、金剛夜叉明王から上下二文字をいただき、子を「金王丸」と名づけた。「こんのうまる」と読む。長じて渋谷常光となったが、渋谷金王丸常光ともいった。

③ 金王丸が十七歳のとき、源義朝に従って保元の乱(一一五六)に参戦して大功を立てたが、その後、義朝が落命すると、金王丸は渋谷で剃髪し、土佐坊昌俊と称して義朝の御霊を弔った。しかし金王丸と土佐坊昌俊は別人とする説がある。どちらが正しいのか?

④ 義朝の子、源頼朝が源氏の棟梁として挙兵し、平家を討ったが、壇ノ浦の戦い後、頼朝は弟義経に謀反の疑いをかけ、土佐坊昌俊に義経を討つよう命じた。昌俊はそれを断りきれず、死を覚悟して京へ上り、義経勢に捕まり斬首されたという。

その一方で、昌俊の亡骸は武蔵国児玉郡(現在の埼玉県児玉郡)の塩谷まで運ばれ、そこで埋められたともいう。一体どちらが本当か?

以上のような松崎の説明と質問を、金次郎は腕

組みしながら聞いていた。

「なるほど、よく調べましたね。というより、少し調べれば誰もがぶつかる疑問です」

「はあ、そうですか。では渋谷さんの中では、すでに解決済みというわけですか」

「いいえ。千年近くも前の出来事ですから、不明な部分があつて当たり前でしょうね。私は自分なりにこう解釈しています」

そう言つて、金次郎は次のように答えた。

① 創建（御祭神の勧請、鎮座）は、流れから言つて川崎基家であろうが、源義家も創建の儀式に立ちあつたのではないか。神社に権威を持たせるためには源義家が勧請したとするほうがよいので、そういう伝承が残つたと思われる。

② 渋谷の賜姓が先か、渋谷という地名が先にあつたのか、という疑問は、一般的には地名が先にあつたと考えたほうが事実に近いだろう。その地名（渋谷）を河崎氏に天皇が姓として与えた、ということではないか。

③ 金丸と土佐坊昌俊は同一人物か別人か、という疑問は難しい。これは④の死亡時の問題とも絡む。私（渋谷金次郎）は別人とみている。根拠はあるが弱い。

④ 昌俊は京都で斬首されたのか、それとも亡骸が埼玉県の塩谷にまで運ばれて埋葬されたのか、という問題も難しい。まず、亡骸が京都から埼玉まで運ばれたという説は無理。ありえない。

しかし、斬首されたのは影武者だったという説もある。仮に影武者だったとしても、昌俊本人が塩谷へ行く理由が乏しい。私は、京都で斬首されたという説をとる。

渋谷金次郎の答えを要約すると、右のようになる。説明は詳細で、松崎誠一にとっては説得力十分だった。

「いやあ、さすが歴史研究家ですね。肩書はダテじゃない」

松崎がそう言つと、金次郎は歴史研究家という肩書の名刺をくれた。名刺には肩書、氏名、携帯電話番号しか書かれていない。しかし威厳のありそうな名刺である。以前、国会議員からも似たような名刺をもらったことを思い出した。

食事と話が終わるころ、いつの間にか松崎の後ろの席に、いつぞやの若い女性が座つてコーヒを飲んでいた。

金次郎は女性に「帰るよ」と声をかけ、松崎には「女房が若いので……」と照れ笑いを見せた。

「えっ奥さん！」

松崎は驚いて女性を振り返った。美人である。正直うらやましいと思つた。

その後、金次郎とは二回ほど電話で話したが、ぶつりと電話が通じなくなった。

電話の不通をいぶかしみ、例の刑事に問い合わせたところ、こう教えてくれた。

「渋谷金次郎は死んだよ。享年六十。脳卒中だったらしい。嫁さんが若くてなあ、三十歳も年が離れていた。それに渋谷は三つも戸籍を持っていて。公文書偽造だな。どれが本物か調べりゃ判るが、被疑者死亡じゃ調べる気も失せるよ」

呆然とした。詐欺師とはいえ、事実に対しては誠実な男だつたと思う。九十九パーセントの事実と一パーセントの嘘に生きた男。

しかしマスコミはもつと低劣だ。我々は八十パーセントの事実と二十パーセントの嘘（憶測や臆見）を垂れ流しているのではないかと、松崎は忸怩たる思いにとらわれていた。

（おわり）

【この物語はフィクションであり、実在の人物・団体とは無関係です】



(表紙説明)

■組手細工(くでざいく)

日本ならではの美しい障子の技が、繊細な「組手細工」の品々によみがえる。表紙は、壁掛けやコースターにもなる伝統文様の木組み。日本の瓶にも似合う。

有限会社 森本建具店

所在地／香川県高松市三谷町一七六一

TEL／〇八七―八六四―八八七二

FAX／〇八七―八六四―八八七三

「酒林」随筆特集 第八十八号

平成二十六年九月一日発行

発行人 西野 信也

印刷所 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市魚井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。

西野金陵株式会社



■酒類部各事業所

- 〔本店〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔高松本社〕
〒760-8544 香川県高松市亀井町2-8 ☎087-835-4133
- 〔高松支店〕
〒760-0064 香川県高松市朝日新町33-40 ☎087-851-4133
- 〔丸亀支店〕
〒763-0083 香川県丸亀市土器町北1-70 ☎0877-23-4133
- 〔徳島支店〕
〒770-0944 徳島県徳島市南昭和町3-53-4 ☎088-653-4133
- 〔松山支店〕
〒790-0925 愛媛県松山市鷹子町546-1 ☎089-975-4133
- 〔岡山支店〕
〒701-0221 岡山県岡山市南区藤田錦564-209 ☎086-296-2136
- 〔洲本支店〕
〒656-0012 兵庫県洲本市宇山3-5-28 ☎0799-22-0788
- 〔大阪営業所〕
〒565-0824 大阪府吹田市山田西2-1-14 ☎06-6877-2671
- 〔東京営業所〕
〒134-0083 東京都江戸川区中葛西4-6-12 ☎03-3686-4133
- 〔観音寺物流センター〕
〒769-1613 香川県観音寺市大野原町花稲1071-1 ☎0875-56-3133
- 〔多度津工場〕
〒764-0028 香川県仲多度郡多度津町葛原1880 ☎0877-33-4133
- 〔琴平工場〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133
- 〔金陵の郷〕
〒766-0001 香川県仲多度郡琴平町623番地 ☎0877-73-4133

■化学品事業部各事業所

- 〔大阪本社〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2444
- 〔大阪支店〕
〒541-0056 大阪府大阪市中央区久太郎町1-6-9 ☎06-6262-2447
- 〔東京支店〕
〒104-0032 東京都中央区八丁堀4-9-4 西野金陵ビル9F ☎03-3552-3427
- 〔名古屋支店〕
〒450-0002 名古屋市中村区名駅4-26-13 ちとせビル5F ☎052-561-5531
- 〔北陸営業所〕
〒918-8231 福井県福井市問屋町3-815 和中ビル1F ☎0776-24-0967
- 〔上海西野貿易有限公司〕
中国上海浦東外高橋保税区基隆路6号 ☎+86-21-6278-9548
- 〔NISHINO KINRYO (THAILAND) CO.,LTD.〕
159/40 Serm-Mitr Tower 26th Fl. Room No. 2606, Sukhumvit 21 (Asoke) Rd. Kwaeng
klongtoey-Nua, Khet Wattana, Bangkok 10110 ☎+66-2-661-7014

〔PT. NISHINO KINRYO INDONESIA〕

- Sampoerna Strategic Square South Tower Level 30 Room No.6 Jl Jend.
Sudirman Kav 45-46, Jakarta 12930 INDONESIA ☎+62-21-2993-0822



西野金陵株式会社
四国・琴平